

# 否定文と節の構造：notの統語論的 位置づけについて

岩 本 弘 道\*

Negation and the Clause Structure of English :  
The Syntactic Status of English *Not*

Hiromichi IWAMOTO

## Abstract

In this paper the syntactic status of English sentential negation particle *not* is investigated. It is claimed that *not* does not belong to adverbs since it shows some headlike behavior with respect to the Empty Category Principle in VP Preposing and VP Ellipsis. This suggests that *not* is a functional head category which has its own maximal projection in the clause structure, as Pollock (1989) and Chomsky (1989) assume in the framework of the Principles and Parameters theory. Criticizing two recent representative adverb analyses of *not* by C.L. Baker (1991) and by Ernst (1992), we show that the Pollock-Chomskian approach is superior.

## 0. 序

本稿では、最近の生成文法で仮定される節構造における英語の否定文の派生を検討する。とりわけ文否定の否定辞 *not* の統語論的位置づけを考察する。

否定辞の *not* は、伝統文法以来、副詞の一種である否定副詞として分析されてきた。しかしながら、同時に *not* は他の否定副詞 *never*, *seldom*, *hardly*, *scarcely* などとは異なった統語的分布を示すことも知られてきた<sup>1</sup>。例えば *not* と *never* を比較すると、助動詞がある場合には同じ分布を示すが、主動詞のみの場合には *do*-挿入の有無に違いが見られる。助動詞がない否定文で *not* を使ったものは *do*-挿入を必要とするが、*never* を使った否定文では *do*-挿入は要求されない。

- (1) John never came to our party.
- (2) a. \*John not came to our party.  
b. John did not come to our party.

この点では次の例が示すように *never* は他の VP 副詞と同じ振る舞いをする<sup>2</sup>。

- (3) a. John often came to our party.  
b. John completely cleaned his room.

このような違いを説明するには、二つの方法が考えられる。一つは、否定辞の *not* が副詞の一種ではないとするものである。もう一つは *not* は否定副詞の一種ではあっても、独自の性質を持つ特殊な副詞であるとするものである。

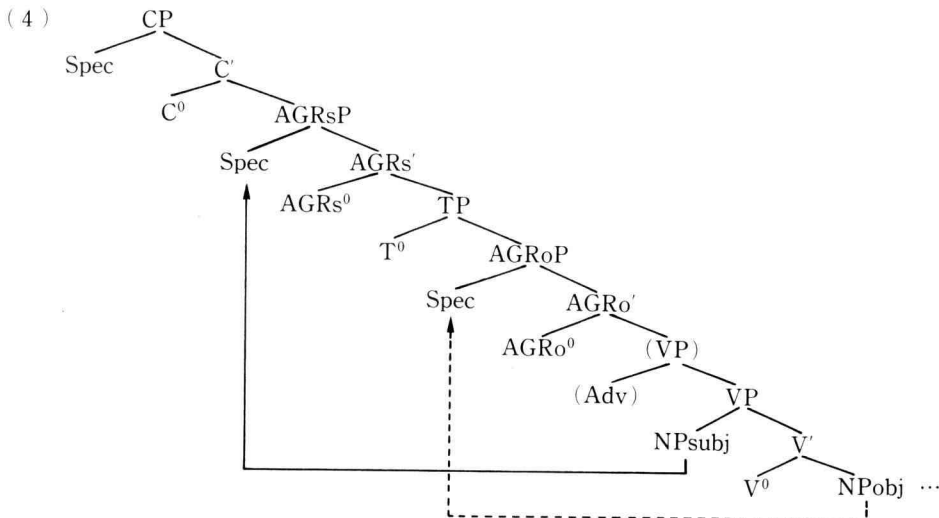
近年の生成文法、とりわけ Chomsky を中心とする「原理と変数の理論 (Principles and Parameters theory)」においては、屈折接辞 (inflectional affixes) と、主要部移動 (head movement/ $X^0$ -movement) との動詞移動 (V-movement) との関係の研究に基づいて、Pollock (1989) が提示した「分離屈折辞の仮説 (Split-INFL hypothesis)」に端を発して、時制辞 (tense: T) や一致要素 (agreement: AGR) がそれぞれ独自に最大投射を持つ機能範疇としての主要部 (functional head) であるばかりでなく、従来は否定辞付加 (*not*-attachment) その他の変形規則、あるいは基底部門の句構造規則によって導入される文法的形式素 (grammatical formative) として扱われていた否定辞 *not* も、これらの屈折接辞と同じく機能範疇

1993年9月29日受理

\* 一般科

(functional category) としてそれ自身が否定辞句 (Negation Phrase: NegP) という最大投射を持つ句の主要部 Neg<sup>0</sup> であるという分析が広く行われるようになった<sup>3</sup>。しかしながら、Pollock の分析には様々な問題点があることが指摘され、分離屈折辞の仮説自体も幾多の批判を受けている<sup>4</sup>。さらに、こうした否定辞を機能範疇の主要部とする分析に対して反対するものもある。そこで、本稿ではそれらが提示する問題点を検討し、英語の否定文がどのような構造を持つかを見て行きたい。そして、not を副詞として分析する案は様々な問題点を持ち、英語の文否定の not は最近の NegP 分析のように独立した機能範疇の主要部であると分析した方がよいことを示す。

以下、第1節及び第2節で、最近の節構造に関する分析を紹介し、その構造に基づいた NegP 分析の概要を Chomsky (1989) に基づいて示し、その分析の枠組



また Chomsky (1992: 10) などに従って、基底では節の主語 NP (NPsubj) が VP 指定部に生成され、S 構造で (4) の AGRsP 指定部へ移動するという「VP 内主語の仮説」を仮定する。目的語 NP に関しては、本稿の議論には直接関係無いが (4) での破線が示すように、Chomsky (1992) の「極小主義 (minimalist program)」に従い、LF で AGRo の指定部に移動されて、目的格を付与されると仮定しておく。

### 1.1. 肯定文の派生

否定文の分析に入る前に、(4) の構造に従って英語の文がどのように派生されるかを、まず肯定文に関し

みでの英語の否定文の派生を概観する。続いて第3節では、NegP 分析がもつ潜在的な問題点を二つ検討し、続いて第4節で、こうした最近の拡大節構造及び NegP 分析を批判して、not が機能範疇ではなく副詞の一種であるとした方が好ましいとする分析の代表的な例として C.L. Baker (1991) の分析と Ernst (1992) の分析を取り上げ、いくつかの問題点を指摘し、その妥当性を検討することにする。そして最後に、第5節で結論を述べる。

## 1. 拡大節構造と NegP 分析

まず始めに、本稿での分析の基礎となる節構造を見ておく。Chomsky (1989: 434) は Pollock (1989) に基づいて、英語の節の構造は次の (4) のようなものであると仮定する<sup>5</sup>。

て見てみよう。

Pollock, Chomsky によれば、フランス語・イタリア語などのロマンス系言語では AGRo, T [+finite], AGRs の全てが強いので時制節では助動詞・本動詞の動詞は全て主要部移動により S 構造で AGRs まで上昇する。それに対して、英語では AGRo が弱いので  $\theta$  理論から本動詞を VP から引き上げない。一方、付与すべき  $\theta$  役を持たない相助動詞の have, be はフランス語と同じように S 構造で AGRs<sup>0</sup> まで上昇する。法助動詞も S 構造で AGRs<sup>0</sup> にある。

従って、時制節においては、英語とフランス語で定形動詞 (finite verb) の生起する位置に関して次のよう

な差が見られる。ここでは, often/souvent の副詞は D 構造で VP の左端に付加されると仮定する<sup>6</sup>。

- (5) a. Mary often seems sad.  
b. \*Mary seems often sad.  
(6) a. Marie semble souvent triste.  
b. \*Marie souvent semble triste.

このことは, 時制節においては, 英語では (7) に示すように S 構造で主動詞が VP 内に留まっており, 一致要素 (AGRs)・時制辞 (T) が順に上から繰り下がり VP 内の V に接辞化するという AGRs/T 繰り下げ (従来の接辞移動 (Affix Hopping), あるいは Chomsky (1981) での規則 R に相応する) が適用されるのに対して, フランス語では (8) のように VP から AGRs へ義務的に繰り上げられることを示している<sup>7</sup>。

- (7) Mary t [<sub>VP</sub> often [<sub>VP</sub> seem-T-AGRs sad]]  
(8) Marie [sembl-T-AGRs] [<sub>VP</sub> souvent [<sub>VP</sub> t triste]]

それに対して助動詞がある場合は, 英語もフランス語も同じ語順となる<sup>8</sup>。

- (9) a. Mary will often kiss John.  
b. Mary has often kissed John.  
c. Mary is always kissing John.  
(10) Marie a souvent embrasse Jean.

従って, 英語でも相助動詞の have/be は, (10) に示すように, 主動詞とは異なり, フランス語の動詞と同じように S 構造で VP から AGRs まで繰り上げられていると考えられる。

- (11) Mary [have-T-AGRs] [<sub>VP</sub> often [<sub>VP</sub> t [<sub>VP</sub> kissed John]]]

このことは, 英語の疑問文で助動詞は AGRs-to-C 移動により文頭に生起するが, 主動詞の場合は (13b) のように文頭に動詞が生起することはなく, do-挿入が必要になることからわかる。

- (12) a. Will Mary often kiss John?  
b. Has Mary often kissed John?  
c. Is Mary always kissing John?  
(13) a. Does Mary often kiss John?  
b. \*Kisses Mary often John?

また, フランス語の V 繰り上げは時制節では義務的

であるが, T が [-finite] の不定詞節では次の (14) が示すように随意的である。

- (14) a. souvent paraître triste  
b. paraître souvent triste

これは, 非時制節の T [-finite] は英語・フランス語にかかわらず弱いために主動詞を引き上げないからであり, 主動詞は AGRo<sup>9</sup> の位置に随意的に移動可能だからである。それに対して, 英語ではこのようなことはなく, AGRo が弱いために, 時制節と同様に不定詞でも主動詞は VP 内に留まっている<sup>9</sup>。

- (15) a. to often appear sad  
b. \*to appear often sad

以上, 要点をまとめると, Chomsky の分析では, 英語の動詞に関しては助動詞類は S 構造までに VP からその上の T を経て AGRs まで繰り上げられるのに対して, 主動詞は英語の AGRo が弱いために S 構造でも依然 VP 内に留まっていることになる。

英語の否定文については第 2 節で考察することにして, その前に主要部移動についての制約を見ておくことにする。

## 1.2. 主要部移動と主要部移動制約

AGRs や T などの屈折接辞は動詞の主要部移動によって動詞と融合(merger)していきと考えられる。この結果, 移動先の順序が動詞の接辞の線条的順序に反映されるという主旨の M. Baker (1988) の「鏡像原理 (Mirror Principle)」が説明される。そして, 主要部移動は, 概略, 主要部移動はそれを統率するすぐ上の主要部にしか要素を移動できない, という主旨の次の「主要部移動制約 (Head Movement Constraint: HMC)」(16) に従うとされる<sup>10</sup>。

- (16) 主要部移動制約 (HMC)

An X<sup>0</sup> may only move into the Y<sup>0</sup> that properly governs it.

この制約は次に示すような Rizzi (1990) の相対化最小性 (Relativized Minimality: RM) の原理 (17) に基づく空範疇原理 (Empty Category Principle: ECP) (19) から派生される制約である。

- (17) 相対化最小性の原理 (RM) (Rizzi 1990: 7)  
X α-governs Y only if there is no Z such

that

(i) Z is a typical potential  $\alpha$ -governor for Y;

(ii) Z c-commands Y and does not c-command X.

(18) Z is a typical potential governor for Y, Y in an X<sup>0</sup>-chain, iff Z is a head c-commanding Y.

(19) 空範疇原理 (ECP)

Empty categories must be properly governed.

そして、本稿で扱う主要部移動に関しては、(19)における適正統率 (proper government) の条件はは次に挙げる先行詞統率 (antecedent government) によって満たされる<sup>11</sup>。

(20) 先行詞統率

X antecedent governs Y iff:

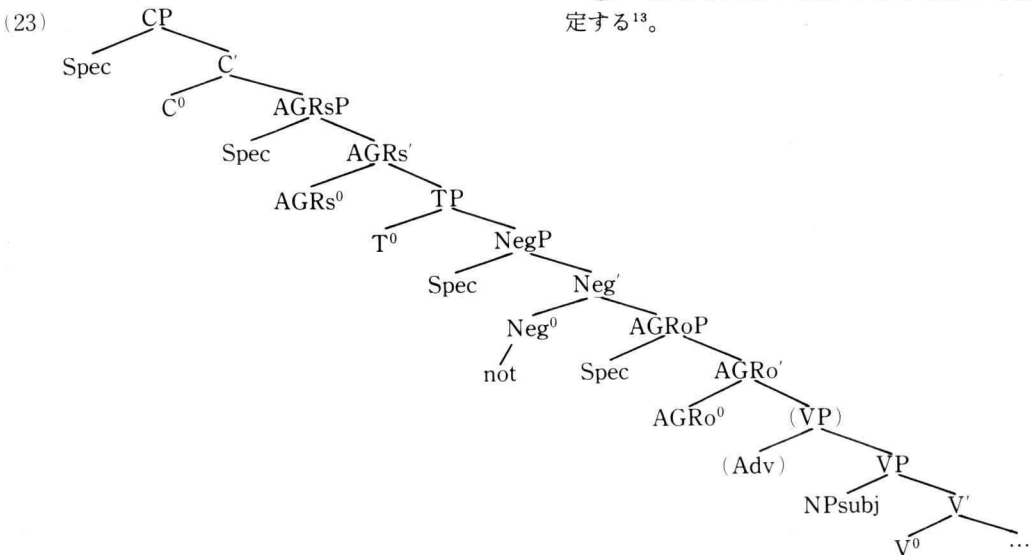
(i) X and Y are coindexed;

(ii) X c-commands Y;

(iii) no barrier intervenes;

(iv) Relativized Minimality is respected.

さて、HMCは次の(21c)(22b)に見るように、斜体字で示されたすぐ上の主要部を飛び越してその先の主要部へ移動するような派生を正しく阻止するために必要である。



(21) a. John must have posted the letter.

b. Must<sub>t</sub> John t<sub>i</sub> have posted the letter.

c. \*Have<sub>t</sub> John *must* t<sub>i</sub> posted the letter.

(22) a. Jean a completement t lu Franz Kafka.

b. \*Jean lui completement a t<sub>i</sub> Franz Kafka.

ここで注意したいのは、HMCによれば、統率の定義から、繰り下げ移動 (lowering) は全面的に禁止されることになるということである。従って、HMCによれば上で見たような英語の AGRs/T 繰り下げを許さないはずである。では、何故英語の肯定文では繰り下げが許されるのであろうか？

Chomsky は、HMCがECPに還元されるもので、それ自体は独立した原理ではないと解釈し、さらに、ECPの適用される表示のレベルは、一般にLFであるとされることから、S構造で残された痕跡の位置にLFで屈折辞と融合した主動詞が繰り上がっていき、最終的にはAGRsまで上昇し、ECPを満たすと説明する<sup>12</sup>。この分析によれば、LFで救済される限りにおいて、可視統語論での繰り下げ変形は認められるということになる。この分析は、次節で考察する否定文の派生でも重要な意味合いを持つことになる。

## 2. 英語否定文の派生と主要部移動

本節では否定文の派生を考察する。まず、否定文の構造はChomsky (1989) に従い前節で見た(4)にNegPの加わった次の(23)のようなものと仮定する<sup>13</sup>。

以下では、この構造に基づいて否定文がどのように派生されるかについて、そしてその際に関連する主要部移動と ECP の関係を見ていくことにする。

### 2.1. フランス語の否定文

まず、フランス語の否定文の派生を概観する。(24)に示すようにフランス語の時制節では動詞は義務的に pas の左側に生起しなければならない。(25)のように ne は口語的フランス語では省略される傾向にある。

- (24) a. Jean n'embrasse pas souvent Marie.  
 b. \*Jean ne pas souvent embrasse Marie.  
 (25) Jean embrasse pas souvent Marie.

このことは、フランス語の時制節では全ての動詞 V が (NegP を越えて) AGRs/T の位置に移動していることを示している。また、フランス語の否定辞は主要部に ne を持ち、pas は NegP の指定部に生成される副詞であると考えられる。ne は動詞に接辞化して pas を越えていく。

非時制節である不定詞節では、フランス語の V 繰り上げは随意的であることを上で見たが、次の (26) (27) が示すように、不定詞節では、時制節と異なり否定辞 pas を越えられるのはフランス語でも助動詞の être/avoir だけで、本動詞は NegP を越えて T へ移動することはできない。これは [-finite] の T が弱い範疇で、英語の AGRo と同じように  $\theta$  役を付与する動詞を引き付けられないからである。

- (26) a. ne pas sembler heureux  
 b. \*ne sembler pas heureux  
 (27) a. ne pas être heureux  
 b. n'être pas heureux

こうした例を説明するために、Pollock (1989) は Neg の下に AGRo への V 移動が存在すると仮定する事が必要となると主張する。このことは次のような否定辞と VP 副詞が共起した。

実際、英語でも不定詞節では同じような短距離移動が相助動詞の have/be に関して観察される。そして、こうした移動は (28) のように主動詞には見られない。

- (28) a. to always arrive late  
 b. \*to arrive always late  
 (29) a. to always be working late

- b. to be always working late  
 (Haegeman 1992: 169)

- (30) a. to not always be working late  
 b. to not be always working late  
 c. \*? to be not always working late  
 (Haegeman 1992: 169)

ここで always のような副詞は VP に付加される位置に基底生成されると考えられるので、(29b) (30b) のような例を説明するためには否定の not と VP 副詞 always との間に主要部である動詞の移動先がなくてはならない。それが (23) の AGRo<sup>0</sup> であると考えられる。また (30c) は、フランス語の (27b) と同じように、be が T [-finite] まで移動した例と考えられる。以上のような事実から、英語にもフランス語同様に AGRo が存在すると仮定する<sup>14</sup>。

### 2.2. 英語の否定文

第 1 節で、英語では AGRo が弱いために時制節では have/be の相助動詞のみが VP 内から主要部移動によって T/AGRs まで上昇でき、主動詞は S 構造で VP 内に留まっていることを見たが、ここではこのことが英語の否定文での助動詞と主動詞に関する差異をどう説明するかを見る。

まず英語の文否定は、助動詞がある場合には通常、主節では時制を伴った助動詞の直後に not を置いて表される。

- (31) a. John will not come.  
 b. John can't dance well.  
 (32) a. John would not come.  
 b. John could not dance well.

(31) (32) のような法助動詞の場合は、とりあえず、D 構造で (23) における NegP の上の T<sup>0</sup> に基底生成されると考えることで説明される。

- (33) a. John has not come yet.  
 b. John is not waiting.

一方、(33) のような相助動詞の場合には、have/be が VP から繰り上げられ、not を越えて T/AGRs まで移動しているとすれば説明される。

それに対して、助動詞が無く主動詞だけの場合には do-挿入が義務的になされる。

- (34) a. John does not come.

- b. John did not kiss Mary.  
 (35) a. \*John comes not.  
 b. \*John kissed not Mary.  
 (36) a. \*John not comes.  
 b. \*John not kissed Mary.

(35) が非文法的なのは、肯定文と同じく、英語では主動詞は VP から繰り上げられないことで説明される。一方、(36) は、肯定文と違い、否定文では T/AGRs が VP 内の動詞へ繰り下げられないことを示している。そして do-挿入が、接辞である T<sup>0</sup> を支えるために義務的に行われる<sup>15</sup>。そして、さらに一致を満たす為に AGRs まで繰り上げられると考えられる。このことは否定辞の not が接辞要素の T/AGRs の降下を阻止しているためであると考えられる。

さらに (37) に見るように not は do の前には生起しない。これは助動詞の場合も同じである。

- (37) a. \*John not does kiss Mary.  
 b. \*John not did kiss Mary.  
 (38) a. \*John not will come.  
 b. \*John not could dance well.

このことは (23) のように D 構造では NegP が T より下にあるとすることで正しく説明される。

### 2.3. not と -n't

さて、英語の否定辞 not の特徴として、それが自由形態素であるということがある。接辞化したものには -n't がある。両者の違いは否定疑問文で現れる。英語の疑問文は先述のように AGRs<sup>0</sup>-to-C<sup>0</sup> 移動というこれも主要部移動によって派生される<sup>16</sup>。従って not が Neg<sup>0</sup> の位置に残っているとすると、not は助動詞や do と一緒に文頭の C<sup>0</sup> に移動しない事が予測されるが、それは正しい。

- (39) a. Will John not have bought the yogurt?  
 b. \*Will not John have bought the yogurt?  
 (40) a. Have you not met Ann yet?  
 b. \*Have not you met Ann yet?  
 (41) a. Did John not buy the yogurt?  
 b. \*Did not John buy the yogurt?

それに対して、接辞である -n't は助動詞や do とともに C<sup>0</sup> に移動しなければならない。

- (42) a. Won't you come to our party?

- b. \*Will you -n't come to our party?  
 (43) a. Didn't you buy the yogurt?  
 b. \*Did you -n't buy the yogurt?

こうした事実は、-n't は Neg<sup>0</sup> に接辞として基底生成され、その上の T<sup>0</sup> に生成された法助動詞や do に接辞化していることを示している。そしてこれも一種の主要部移動と考えられる。このことは (44) (45) に見るように相助動詞にも当てはまる。

- (44) a. Haven't you seen him before?  
 b. \*Have you -n't seen him before?  
 (45) a. Have you not seen him before?  
 b. \*Have not you seen him before?

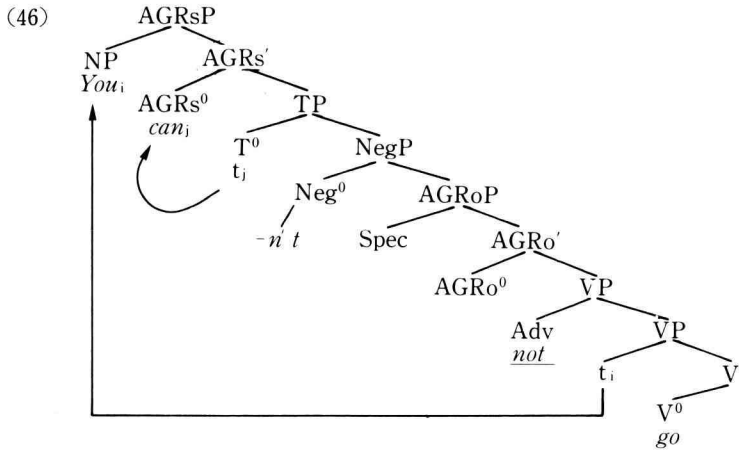
これは VP の主要部として基底生成された相助動詞が主要部移動により一端 T<sup>0</sup> に繰り上げられて Neg<sup>0</sup> にある -n't が接辞化され、その後 AGRs<sup>0</sup> まで移動すると仮定することで説明できる。一方、どの場合にも接辞ではない not は Neg<sup>0</sup>に残ったままであることを示している<sup>17</sup>。

### 2.4. VP 否定の not

前節で見てきた否定辞の not は、時制節では定形動詞の直後、非時制節では to の直前・直後の位置に生起するものであった。しかし、英語の not は次の例が示すようにこれ以外の位置にも生起することがある<sup>18</sup>。

- (46) a. Terry must not have been being followed.  
 b. Terry must have not been being followed.  
 c. ?Terry must have been not being followed.  
 d. \*Terry must have been being not followed.  
 (Ross 1991: 459)

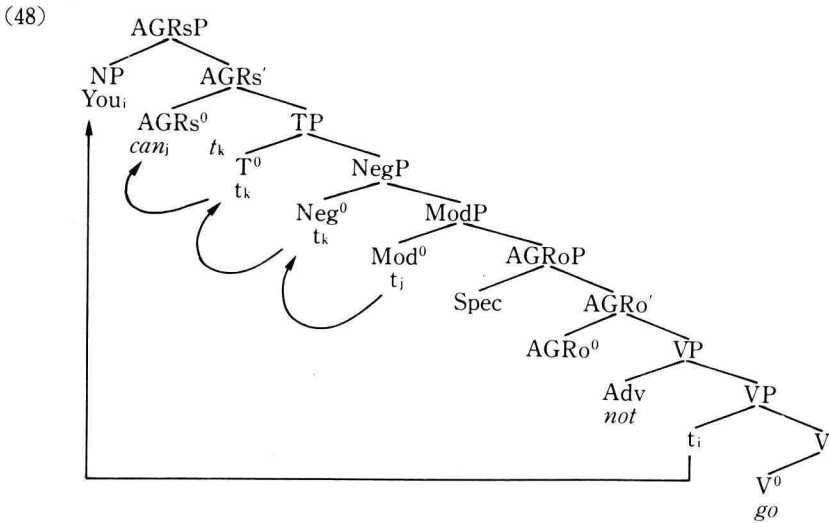
これらの例は not が (23) における Neg<sup>0</sup> の位置に生成される文否定の否定辞ではなく、Culicover (1982: 147) などが言う構成素否定の not であり、VP に付加される位置に生成される否定副詞の not であると考えられる。この VP 副詞の not はどのみち (47) のような二重否定文（あるいは多重否定文）の生成に必要なものである<sup>19</sup>。



- (47) a. You can't not go.  
 b. Charley wouldn't not have been looking out of the window.  
 c. John has not deliberately not paid his taxes for at least two years.

このように英語では  $Neg^0$  に生起する文否定の not の他に、もう一つ VP 否定の not が存在する。そしてこの VP 否定の not は他の VP 副詞と同じく VP に付加

される位置に生成されると考えられる。そうすると、例えば (47a) のような二重否定文の句構造は S 構造で次の (48) のようなものになるであろう<sup>20</sup>。



### 2.5. 強調 (emphasis) と NegP 分析

do-挿入が生じる環境としては、疑問文・否定文の他にも、強調の do を伴った文というものがある。肯定文を強調する手段は、例えば分裂文のように、いろいろあるが、動詞を強調するのに do-挿入を伴うものがあ

り、それは否定文での do-挿入とほぼ同じ環境で生じる。ただし、強調の DO は強勢を必要とする点で、否定文での do とは違う。さらに、助動詞がある場合には、助動詞に強調強勢が置かれ（大文字で示す）、do-挿入は要求されない。

- (49) a. John **MUST** visit the store.  
 b. John **HAS** visited the store.  
 c. John **IS** visiting the store.  
 (50) a. \*John **DID** must visit the store.  
 b. \*John **DID** have visited the store.  
 c. \*John **DID** be visiting the store.  
 (51) a. \*John **VISITED** the store.  
 b. John **DID** visit the store.

こうした、強調文には NegP と同じ位置に強調辞句 (EmphP) が存在するとすれば、これらの例は同じように分析可能となる。否定辞 not と同じ位置に強調辞 so/too が生起する事も知られている (Culicover 1982: 143)。その場合も助動詞が無い場合には do-挿入が義務的に適用される<sup>21</sup>。

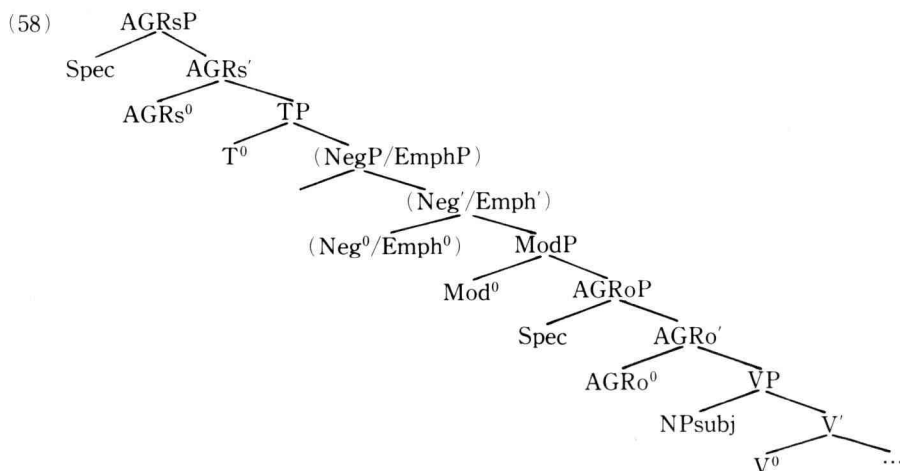
- (52) a. Mary will so win the prize.  
 b. He does too want to go.

こうした強調の副詞はいわゆる助動詞の直後にしか生起しない、すなわち、否定辞の not と同じ分布だということが知られている (Culicover 1982: 143)。

- (53) a. \*So, Mary will win the prize.  
 b. \*Mary will win the prize, so.

また、Neg と Emph が相補分布の関係にあることも知られている (Binkert 1984: 127)<sup>22</sup>。

- (54) a. \*You can't so go.  
 b. \*He won't too do it.



- (55) a. I didn't, as Bill had thought, go to the store.  
 b. I **DID**, as Bill had thought, go to the store.  
 c. \*I **DID** not, as Bill had thought, go to the store. (Laka 1990)

(54) は否定辞の not と強調の so/too が、(55c) は文否定の not と空の強調が同時に生起できないことを示している。これらの例は否定辞と強調辞が同じ位置を占めると考えれば説明がつく。さらに、先述の(47)のように否定辞 not には文否定の Neg とは別に、VP 付加の否定副詞の二つがあったことを思い出してほしい。

そして、次の例は強調辞が VP 付加の not とは共起できることを示している。(Binkert 1984: 127)。

- (56) a. You can so not go.  
 b. You can too not go.

(56) の not が Neg に生起する文否定のものではないことは、次の例からも支持される。

- (57) a. \*You can't so not go.  
 b. \*You can't too not go.

こうした例は、強調辞が文否定の否定辞と同じ位置に生成されるとすることで全て説明がつく。従って、強調辞も否定辞と同じく主要部として最大投射である強調辞句 EmphP を持つ機能範疇であると分析できる。そこで、(48) で仮定した節構造をさらに EmphP も含めて次の (58) のように修正する<sup>23</sup>。



このような強調辞の分布も、間接的にだが、NegP という機能範疇の必要性を支持するものであると考えられる。また、このような節構造を仮定すると法助動詞と相助動詞の have/be が強調によって対照強勢が付与されることにも、T<sup>0</sup> の位置にあるこれらの動詞要素に形式をもたない一種のゼロ接辞 ((58) では  $\phi$  で示してある) と考えられる Emph<sup>0</sup> が、ちょうど -n't と同じように接辞化すると考えることで説明できるし、主動詞のみの場合には否定文と同じように do-挿入が必要とされることが統一的に説明されることになる。

### 3. NegP 分析に関する 2 つの潜在的問題

以上の分析は、not が NegP の主要部をなすという仮定のもとで行われてきたわけであるが、not が主要部であるとする、問題となる可能性を持つ点が少なくとも二つあると思われる。本節では、それらの問題点を検討し、その解決策を考えることにする。

#### 3.1. 否定文における HMC 違反の問題

まず、そもそも、フランス語などと違い、英語の肯定文では何故、一見 ECP の違反を引き起こすような主要部繰り下げが起こるのか、という問題がある。それに対しては、Chomsky (1989: 428-430) は、英語の AGR は「弱い」ので  $\theta$  付与能力のある主動詞を引き上げない。そのままでは接辞である T が孤立するので、正しい派生を救うために、主要部繰り下げが起こる。このことにより、フランス語などと異なり英語では S 構造で主動詞が接辞を付加された形で VP 内に留まることが、正しく説明できる。しかし、このままでは ECP 違反が生じるので、動詞は LF で T (さらには AGRs) まで繰り上げられ、ECP が LF で適用されると仮定することで、S 構造での ECP 違反は仮のものであり、LF では正しく ECP を満たすために文法的となる、という説明をしている。

それに対して、否定文では、not が主要部であるとする、主動詞に関しては次の例が示すように、(59a) の D 構造において、T/AGR 繰り下げは相対化最小性から not によって阻止され、do-挿入が「最終手段」として起こっているように見える。

- (59) a. John T NEG AGRo [<sub>VP</sub> write books]  
 b. John does/did not write books.  
 c. \*John writes/wrote not books.

#### d. \*John not writes/wrote books.

一方、相助動詞は  $\theta$  役付与能力がないので、(60a) の D 構造の位置から、可視的統語で弱い AGRo を經由して T まで繰り上がる。この場合には not は HMC に反して主要部移動を阻止しない。

- (60) a. John T NEG AGRo [<sub>VP</sub> have written books]  
 b. John has not written books.

これだけを見ると、not は主動詞に関しては、HMC に従い、可視的な移動 (この場合は繰り下げ) を阻止する主要部の性質を示すが、相助動詞に関しては主要部移動 (この場合は繰り上げ) を阻止しないという、主要部ではない性質を示すという相反する性質を示すことになる。

さらに、Chomsky によれば、「最少努力 (Least Effort)」の原則に従えば、英語特有の規則に訴えた do-挿入による (59a) の派生よりも、UG の原則に従った (59d) の派生の方がよりコストが少なく、正しい派生として認可されるべきものであることになる、という事実とは逆になるという問題が生じる。そこで、Chomsky は (59d) の派生がまずいのは可視的統語における繰り下げが HMC 違反であるからではなく、LF での接辞を付加された動詞の繰り上げが not によって阻止されるからであるとする。しかし、それでも何故、(60) の相助動詞の可視的統語における繰り上げは not によって阻止されず、(59d) の LF での主動詞の繰り上げの方は not によって阻止されるのかという問題が依然として残る。

Chomsky はこの違いを、HMC を派生に関する制約としてではなく、LF で表示に適用される ECP から導出されるものであるとし、not を越す直前の痕跡となる AGRo の性質の差から説明する。すなわち、(60b) の S 構造から派生される LF と、(59b) に動詞繰り上げが適用されてできる LF は次のような違いを持つ。

- (61) John [<sub>TP</sub> [<sub>AGRo</sub> [<sub>V</sub> have]-AGRo]-T [<sub>NegP</sub> not [<sub>AGRoP</sub> [<sub>AGRo</sub> t] [<sub>VP</sub> [<sub>V</sub> t] written books]]]]]  
 (62) a. John [<sub>TP</sub> t [<sub>NegP</sub> not [<sub>AGRoP</sub> t [<sub>VP</sub> [<sub>V</sub> write-AGRo-T] books]]]]]  
 b. John [<sub>TP</sub> [<sub>V</sub> write-AGRo-T] [<sub>NegP</sub> not [<sub>AGRoP</sub> [<sub>V</sub> t] [<sub>VP</sub> [<sub>V</sub> t] books]]]]]]]

(61)と(62b)の違いは、(61)ではAGRoの位置の痕跡が相助動詞の移動の場合には $[_{AGRo} t]$ であるのに対して(62b)では $[_v t]$ であることである。LFでの可能な要素は全て解釈を受けなければならないとする「完全解釈の原理 (the Principle of Full Interpretation: PFI)」に従い、意味解釈に貢献するものだけであるとすると、(61)におけるAGRoの痕跡は、一致はLFでは特に意味に関係しない単なる形式的要素であることから、ちょうど虚辞のitやthereが意味解釈に貢献しないことからPFIを満たすためにLFでは何らかの方法で排除されなければならないのと同じように、排除・削除されねばならないとするのは妥当な仮定である。一方、(62b)でのVの痕跡はLFでの連鎖を介して( $\theta$  役付与能力の転送により) $\theta$  基準のチェックを行うために削除されてはならない要素である。しかしながら、このVの痕跡はECPを満たさねばならないが、統率に関する最小条件 (minimality condition) からnotによって先行詞統率が阻止されてECPを満たすことができず、(1d)は非文法的となる。一方、(61)の相助動詞の場合には、AGRoの痕跡はECPが適用される段階でAffect- $\alpha$ によりその素性もろとも削除されて $[_{AGRo} e]$ となる。ここで、ChomskyはECPは痕跡にのみ関与する原理で、この削除による素性を持たない要素に関してはECPは関与しないと仮定すると、(62b)のように非文法性を引き起こさない。

このように、派生への制約であるHMCは実はそれ自体が原理として存在するのではなく、LFで適用されるECPの関与する現象の一部にすぎないと考えることで、一見矛盾する上記の事実は説明される<sup>24</sup>。

### 3.2. Rizzi (1990) の「否定辞の島」について

Rizzi (1990) は Ross (1984) に基づいて、次のように、付加部のwh-移動は文否定のnotによって阻止されるのに対して、項となる主語・目的語の移動は阻止されないことを指摘している ((63a-c) は Rooryk (1992: 343) からの、(63d) は Rizzi (1990: 83) からの引用)。

- (63) a. (?) Who don't you believe likes book?  
 b. (?) Which article didn't you believe that I selected?  
 c. \*How don't you believe that I selected the article?

- d. \*Why don't you think we can help him?

一方、否定辞notが無い場合はどれも文法的である ((64a-c) は Rooryk (1992: 343))。

- (64) a. Who do you believe likes this book?  
 b. Which article did you believe that I selected?  
 c. How do you believe that I selected the article?  
 d. Why do you think we can help him?

こうしたnotの有無による文法性の差は、次のような例にも見られる (Rizzi (1990: 15) の Ross (1984) からの引用)。

- (65) a. Bill is here, which they know.  
 b. Bill is here, which they don't know.  
 (66) a. Bill is here, as they know (it).  
 b. \*Bill is here, as they don't know (it).

(65b) は know の目的語という項 (argument) である which の移動によって派生され、否定辞があっても移動は阻止されないのに対して、(66b) の as は付加部の移動によるものであり、否定辞notによって移動が阻止されている。

Rizzi はこれらの現象を「否定の島」現象と呼び、否定辞notがVP付加の位置というA'位置に生起し、他のA'移動に対する阻止要素となるという相対化最小性の理論で説明できるとしている。このように分析すれば、否定辞のnotがhave/beの相助動詞の移動を阻止しないことをうまく説明できる<sup>25</sup>。

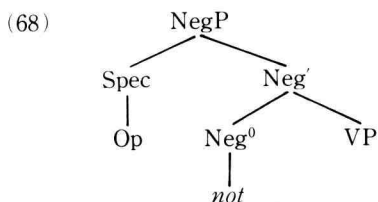
しかしながら、このような分析では英語の否定文ではnotがこれも主要部移動である接辞繰り下げ (Affix lowering) を阻止してdo-挿入を引き起こすということ説明できない。そこでRizziは接辞付加された動詞はLFでA'移動によりTの投射T'へ付加されると分析し、このA'移動がA'位置にある否定辞notによって阻止されるため、次のような形の否定文は排除されるとしている<sup>26</sup>。

- (67) a. \*John  $t_i$  not smoke-s.  
 b. John does not smoke.

このように、否定の島の現象はRizziの相対化最小性分析を採用した場合、notが主要部であるとするChomsky (1989) のようなNegP分析にとっては問題

となる。何故なら、wh-移動はA'移動であり、RMによればそれを阻止するのは主要部ではなくてA'指定部の位置にある要素でなければならないからである。

ここではOuhalla (1990, 1992) で主張されているようにNegPの指定部に空の否定演算子(negative operator: Opと省略)が存在すると仮定することで、A'移動に関する否定の島は説明されると考える。指定部の位置は、例えばthat関係詞節や目的節でのCP指定部のように、一般に演算子の着地点であるので、NegPの指定部にも否定の演算子があると仮定することはそれほどおかしいことではないと思われる。そうすると、否定辞句NegPの構造は次の(68)のようになる<sup>27</sup>。



NegPがこのような構造であるとすれば、A'移動に関するRM効果は指定部の演算子のせいであり、do-挿入の必要性はnotが主要部移動である接辞繰り下げをこれもRMに従って阻止するからであると説明できる。ところで、notを副詞としてVP付加の位置に生成する分析にとっても否定の島の現象は問題である。何故ならVP付加の位置がA'指定部ではないからである。<sup>28</sup>

#### 4. 否定副詞分析の検討

前節で見たような問題が生じるのはnotをNeg<sup>0</sup>と仮定するからであって、notは否定副詞として分析した方がよいと主張するものもある。本節では、そうした批判の代表的なものとしてC.L. Baker (1991)とErnst (1992)を検討し、彼らの分析が十分に妥当なものではないこと、ひいてはNegP分析を否定するものとは言えないことを見ていく。

その前に、まずよく知られているnotと他の否定副詞との違いを見ておきたい。そして、その後 Baker, Ernstがこの違いをどのように分析するかを見て、彼らの分析の問題点を検討していく。

#### 4.1. Notと他の否定副詞との違い

本稿の始めて見たように、助動詞がない否定文でnotを使ったものはdo-挿入を必要とするが、neverを使った否定文ではdo-挿入は要求されない。

(69) John never came to our party. (=1)

(70) a. \*John not came to our party.

b. John did not come to our party. (=2)

この点ではneverは他のVP副詞と同じである。

(71) a. John often came to our party.

b. John completely cleaned his room.

(=3)

ただし、非時制節(不定詞節・動名詞)では、notとneverは同じ分布を示す。<sup>29</sup>

(72) a. never to return

b. not to return

(73) a. to never return

b. to not return

その他のVP副詞もtoとVの間に生起する。いわゆる分離不定詞(split infinitive)と言われるものである。VP副詞はtoの直前にも現れ得る。

(74) a. John tried to always be punctual.

b. ? John tried always to be punctual.

(75) a. It is important for you to carefully look into the problem.

b. ? It is important for you carefully to look into the problem.

同じことが、やはり非時制節である動名詞や分詞についても言える。

(76) a. I regretted Jane('s) not coming here.

b. I regretted Jane('s) never coming here.

c. I hate Jane('s) often coming here.

(77) a. \*I regretted Jane('s) coming not here.

b. \*I regretted Jane('s) coming never here.

c. \*I hate Jane('s) coming often here.

(78) a. Never having read the book,

b. Having never read the book,

このように、非時制節でははっきりしないが、時制節での分布からもわかるように、否定辞notは他の否定

副詞とは統語的に異なった振る舞いを示し、副詞とは別の独立した統語範疇を成していると考えられる。にもかかわらず、こうした差は範疇の違いであるというより、not の特殊性にすぎないとして、not も否定副詞であることに違いはないとするものがある。

#### 4.2. C.L. Baker (1991)

C.L. Baker (1991) は、Pollock の AGR (本稿で言う AGRo) の設定には根拠がないと主張し、not は VP 修飾の副詞として他の VP 副詞と同じように VP 付加の位置に生成すべきであるとしている<sup>30</sup>。

まず、not は動詞句 VP(V') に付加された副詞であるとし、not の特殊性は not が UG に属さない (即ち「周辺 (periphery)」に属する) 英語に特有な義務的規則 (79) において指定される要素であることに帰着させている (C.L. Baker 1991: 391, 399)。

- (79) A finite verb must move to the left of *not*.
- |         |          |              |
|---------|----------|--------------|
| not ... | V        | (obligatory) |
| ↑       | [+Tense] |              |
- Condition: V must be [+Special]

ここで (79) の条件にある V [+Special] は定形動詞でも主動詞を除いた法助動詞、相助動詞、それと do の定形のことを指す。また、Baker の分析では、節 (S) は NP と VP からなる外心 (exocentric) 構造をとり、屈折辞の機能範疇を一切認めないので、法助動詞、相助動詞の have/be, do, 主動詞は全て VP の主要部として基底生成されるとしている。

この変形規則により、次の (80) から (83) でのように not は定形動詞の左には生起できないという事実が正しく説明される。

- (80) a. \*Caroll not will send the package.  
 b. Caroll will not t send the package.
- (81) a. \*Martha not has been listening to this lecture.  
 b. Martha has not t been listening to this lecture.
- (82) a. \*Teddy not ever should have responded to the first question. (=D 構造)  
 b. Teddy should not ever t responded to the first question.
- (83) a. \*George not did do his homework last week.

- b. George did not do his homework last week.

Baker はさらにもう一つ、強勢の与えられていない定形動詞を VP 左端へ随意的に移動するという英語特有の規則 (84) も仮定している (C.L. Baker 1991: 390)。

- (84) Move unstressed finite verbs to the left periphery of their phrases (i.e. VP).

この無強勢の定形動詞に適用される移動規則は随意的なものであるので、次の (85) が両方とも文法的であることが正しく説明できる。

- (85) a. ?? Fido probably never even will be given a biscuit.  
 b. Fido will probably never even t be given a biscuit.

また、(84) は対照強勢の置かれた助動詞や主動詞には適用されないので、次のようにそれらが VP 副詞の前に生起しないことも説明できる。

- (86) a. Harold never WAS very polite.  
 \*Harold WAS never very polite.  
 b. George probably never really DID his homework.  
 \*George DID probably neve really his homework.

さらに、この二つの規則の連動によって、次の (87) のような一連の文も正しく派生される。また、(85a) と (85b) の差は not に対する (81) の規則の義務的適用の結果として説明される。一方、(84) は随意的な規則であるので次のような (87b) (87c) がともに文法的であることも正しく説明できる。

- (87) a. \*The students [<sub>VP</sub> probably [<sub>VP</sub> not [<sub>VP</sub> always [<sub>VP</sub> will [<sub>+Special</sub>] [<sub>VP</sub> be told what the answer is]]]]]]. (=D 構造)  
 b. The students probably will not always t be told what the answer is.  
 c. The students will probably t not always t be told what the answer is.

NegP を仮定する分析では、これらの例を正しく派生するためには副詞の生成位置を Pollock や Chomsky の提案とは異なり、always のような VP 付加だけでな

く, probably を生成するために AGRs' にも仮定しなければならぬのに対して, Baker の分析では全て VP に多重付加するだけで済み, 「修飾部はそれが修飾する XP に付加される」という原理ひとつで済み, 分析としてはより簡潔なものとなるが, 指摘されている。しかしながら, 副詞の生成位置に関しては必ずしも XP 付加だけではすまないと思われるので, 必ずしも強い反論とはならないように思われる (cf. Jackendoff 1972, Roberts 1987, McCawley 1988)。

さらに, Baker のこの分析にはいくつかの問題点がある。まず, 理論的に見て, 強勢弱化 (stress reduction) という音韻規則が, 動詞移動の適用に関与するという点で, 統語論の自律性 (autonomy of syntax) を犯していることが問題である。さらに, Baker の分析では, D 構造で副詞は定形動詞の前に生成され, 強勢の置かれない定形動詞しか副詞の前に移動されないわけだから, 強勢の置かれた助動詞が副詞の前にくることは有り得ないことを予測するが, (88) の文が文法的であることからわかるように, これは経験的に正しくないことが指摘されている (cf. Sag 1980, Ernst 1983)<sup>31</sup>。

- (88) I understand your insecurity about our desire for you to remain at the company. Yet—we DID recently offer you a higher salary than our CHAIRMAN gets. Doesn't THAT mean anything to you?  
(Ernst 1983: 545)

さらに, Baker の分析では, 以下に見るような VP 前置や VP 削除の例がうまく扱えない。これらの構文はともに空の VP を生じるが, この空範疇は, 他の移動によって生じる空範疇同様に ECP によって規制されていると考えるのがよい。その場合, not は他の副詞とは異なり, 主要部として空の VP を主要部統率していると考えねばならない証拠がある。この事実は Baker のように not を他の副詞と同等に扱う分析では説明できない。

#### 4.2.1. VP 前置と否定辞 not

さて, まず VP 前置から見て行こう。VP 前置は, VP 話題化 (VP-topicalization) とも言える, いわゆる VP を節頭に移動する変形であり, これも  $\alpha$  移動の一種としての XP 移動であるからには, 残された VP 痕跡が, 通常の NP 痕跡, wh 痕跡と同様に, ECP に従うものとされる<sup>32</sup>。まず (89) に見るように法助動詞がある場

合には, 法助動詞が適正統率要素となり, 文法的である。しかし, 法助動詞は VP と一緒には前置されない。これは, そのような移動は AGRs' の移動となり, 移動できる要素は  $X^0$  (主要部) か XP (最大投射) に限られるという移動一般に関する仮定 (Chomsky 1986) に反するし, さらに, 残された痕跡もそれを主要部統率する要素がないため ECP 違反を引き起こすからである。

- (89) a. They all said that Harry had to get his PhD and [<sub>VP</sub> get his PhD]<sub>i</sub> he must t<sub>i</sub>  
b. \*They all said that Harry had to get his PhD and [<sub>i</sub> must get his PhD]<sub>i</sub> he t<sub>i</sub>

次に, 助動詞がない場合には do-挿入が生じていれば, それが ECP を満たし, 文法的になる。しかし, do がいない場合は非文法的になる。

- (90) a. I asked Dan to move the car, and [<sub>VP</sub> move the car]<sub>i</sub> he did t<sub>i</sub>.  
b. \*I asked Dan to move the car, and [<sub>VP</sub> moved the car]<sub>i</sub> he t<sub>i</sub>.

(90) の例のうち (90a) では did が空の VP を主要部統率しているので文法的であるが, (90b) では主要部統率する要素が欠如している (AGRs/T は接辞繰り下げによって空となっている) ために ECP を満たさず非文であると説明される。

ここで, 否定文の場合を見てみると, 次の例が示すように not が主要部統率の条件を満たす要素であることがわかる。

- (91) a. I asked Dan to move the car, but [move the car]<sub>i</sub> he did not t<sub>i</sub>.  
b. ?Kathy said she would not be eating spinach, and [be eating spinach]<sub>i</sub> she will not t<sub>i</sub>! (Ernst 1992: 116, 118)

それに対して, (92) の否定副詞 never や (93) でのようにその他の VP 副詞が痕跡の直前にある場合は, 主要部統率の条件が満たされず, ECP 違反により非文法的になる<sup>33</sup>。

- (92) a. \*I asked Dan to move the car, but [move the car] he would never t!  
b. I asked Dan to move the car, but [move the car] he never WOULD t!

- (93) a. \*They said that John would completely finish the coffee, and [finished the coffee] he will completely t.  
 b. They said that John would completely finish the coffee, and [completely finish the coffee] he will t.  
 (Wexler & Culicover 1980: 292)

こうした点からも、not は never などの副詞とは異なり、主要部であることを支持される。

さらに、構成素否定、即ち VP 否定の not が Neg とは異なり、主要部統率しない、すなわち VP 付加される副詞と同じであることを示す証拠もある。

- (94) Kathy said she would be not eating spinach, and  
 a. \*[eating spinach]<sub>i</sub> she will be not t<sub>i</sub>!  
 b. [not eating spinach]<sub>i</sub> she will be t<sub>i</sub>!  
 (Ernst 1992: 118)

これは、先に見た completely の場合と同じであり、構成素否定の not は VP 付加の位置にある副詞であることを示している証拠となる。

#### 4.2.2. VP 削除と否定辞 not

また VP 削除でも、同じような事実が観察される。VP 削除でも空の VP (<sub>VP</sub> e) はその認可条件として主要部統率を必要とすると考えられ、ECP に従うと言える。

まず肯定文における VP 削除を見てみよう。助動詞がある場合は、S 構造で AGRs まで上昇した助動詞が空の TP を適正統率するので (66) のように文法的である。

- (95) a. Bill could never avoid rush hour, but Sally could [e].  
 b. The committee said they would discuss the issue, and when we arrived they were [e]. (Lobeck 1991: 91)  
 c. Bill has never been concerned about pollution, but Ken always has [e].  
 (Ernst (1983)

それに対して、本動詞のみの場合には統率するための語彙的要素として do-挿入が必要となる。

- (96) a. Because Jane did [e], Mary also quickly

left.

- b. \*Because Jane [e], Mary also quickly left. (Lobeck 1991: 90)

これらの場合はどれも定形の助動詞・do が空の VP を主要部統率するので文法的になると解釈される。つぎに、否定文に関してであるが、時制節の否定文に関しては、VP 前置の場合と同じく、not も ECP を満たす主要部統率の要素であることが次の例からわかる。

- (97) a. Dan would sell insurance, but I would not [e]. (Ernst 1992: 110)  
 b. I asked Dan to move the car, but he did not [e]. (Ernst 1992: 116)

それに対して、次の (98) から (101) が示すように、VP 副詞が空の VP の前にあると主要部統率が阻止されて非法的になる。

- (98) a. \*After John [almost [e]], Mary also quickly left.  
 b. After John almost did [e], Mary also quickly left.  
 (99) a. \*Because Jane suddenly [e], Mary also left.  
 b. \*Because Jane did suddenly [e], Mary also left.  
 c. Because Jane suddenly did [e], Mary also left.  
 (100) a. \*Bill could never avoid rush hour, but Sally could often.  
 b. \*The committee said they would discuss the issue, and when we arrived they were heatedly. (Lobeck 1991: 91)  
 c. \*Bill has never been concerned about pollution, but Ken has always.  
 (101) a. Dan wouldn't sell insurance, but I would [e].  
 b. \*Dan would definitely sell insurance, and Sam would maybe [e]. (Ernst 1992: 110)  
 (102) a. \*Ken said he could sing, and he could obviously [e].  
 b. Ken said he could sing, and he obviously could [e]. (Ernst 1992: 119)

このように、VP 削除に関しても not は他の VP 副詞

とは異なって、主要部の特性を示すことがわかる。従って、こうした VP 削除の例は、空範疇の直前の副詞(付加部)がその前の主要部の統率を阻止するために非文法的になるという、ECP による説明の方が良いことを示唆していると思われる<sup>34</sup>。そういう意味では、これらの構文も文否定の not が主要部である間接的証拠と言えるだろう。

さて、今度は次のような例を見てみよう。(103 b)(104 b) は上で見た例とは違って、一見 not が空範疇を認可していない例であり、not が主要部であることの反例になるように思われるかもしれない。

- (103) Ken said that he could have heard the news, but George
- said that he could not (have) [e].
  - \*said that he could have not [e].
  - said that he could have not heard the news.
- (104) Ken said that he might be doing his homework, but George
- said he might not (be) [e].
  - \*said he might be not [e].
  - said he might be not doing his homework.
- (Ernst 1992: 118)

しかしながら、これらの not は文否定の否定辞ではなく、構成素否定の否定辞である。構成素否定の否定辞は普通の副詞と同じで VP に付加された要素であると考えてもよいことは、上でみた通りである。結局、VP 否定の not は主要部でないため VP 削除を認可しないということになり、ここでも否定辞の not を他の VP 副詞と区別しない Baker の分析よりも ECP 分析の方が正しい予測をするということが言える<sup>35</sup>。

次に、不定詞節における VP 削除を考えてみることにする。まず不定詞節における not の位置には次の二つがある。

- (105) a. He tried not to be so loud.  
b. He tried to not be so loud.

そして次の例が示すように、不定詞では TP の主要部である to は空の VP を認可するが、not は認可しないようである。

- (106) a. Carol told Dan to leave, but John told him not to [e].

- b. \*Carol told Dan to leave, but John told him to not [e].

不定詞における to と not については、分析法に関して不明な点があるが、Ernst (1992) は (107) のような例を挙げて、(106b) が非文法的であることは、時制節とは違って、不定詞節での not は全て通常の VP 副詞と同じであることを示唆している、としている。

- (107) Bill wanted to quietly eat his Cheerios, and George
- wanted to [e], too.
  - \*wanted to quietly [e], too.
- (Ernst 1992: 128)

しかしながら、to も常に VP 削除を認可する訳ではない (Zwicky 1982: 26)。

- (108) a. \*You shouldn't play with rifles, because [to [e]] is dangerous.  
b. You must write a thank-you note, because [not to [e]] would be impolite.
- (109) a. \*She'd like to surprise him, but I don't know whether [to e] is possible.  
b. I want to calculate the bill, but I don't know [how to [e]].

これらの例からは不定詞に現れる not が必ずしも副詞であるかどうかは、判明しない。ただ、Ernst も指摘しているように、こうした時制節と非時制節での VP 削除の差は NegP を直接支配する T の [±finite] の違いに関係があると思われる。ここでは、とりあえずその理由はともかくとして、不定詞節に現れる not は全て主要部統率する要素ではないとしておく<sup>36</sup>。

以上のように、少なくとも時制節においては、文否定の not は VP 前置や VP 削除に関しては主要部としての性質を示すので、C.L. Baker のように not も他の VP 副詞と同じように扱う分析には問題があるということが示せたと思う。

#### 4.3. Ernst (1992)

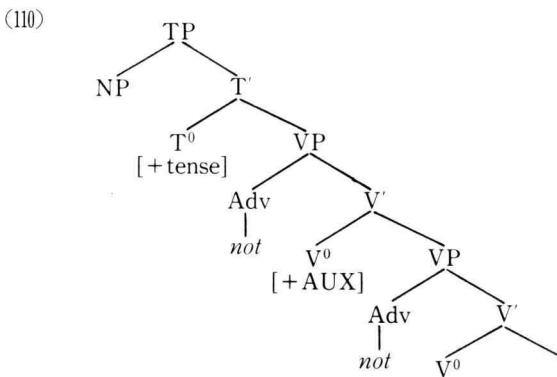
Ernst (1992) は Baker と同じく not は VP 副詞であるとした方がよいとするが、not の特殊性を Baker のように英語に特有な変形規則を仮定することから導き出すのではなく、より一般的な原理に立った分析を試みている。Ernst はまず指定部を次のように規定す

る (Ernst 1992: 125)。

- (108) Spec: An item licensed by the (highest) X' node under adjacency.

そして選択関係を (a) 主要部—主要部間関係と (b) 指定部—主要部間関係の二つ仮定し、英語の T は [±tense] により次のように選択特性が異なるとする。

- (109) a. T[+tense] selects  
 (i) main verb  
 (ii) [+AUX] verb with optional *not* in Spec  
 b. T[-tense] selects *to* (which then selects any verb)



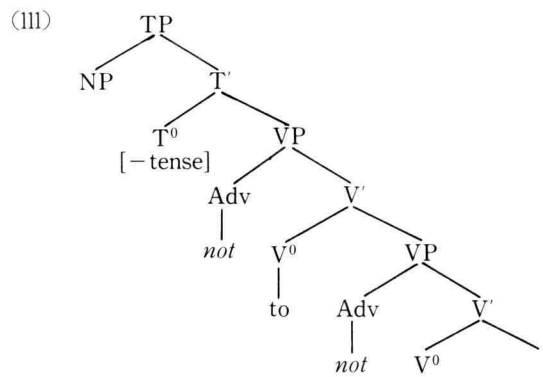
さらに Ernst は法助動詞や *do* も T ではなく *have, be* と同じく V[+AUX] として基底生成されるとしている。こうした分析によれば、まず、*not* は全て副詞でありながら、二重否定や、次のような不定詞における *not* の位置などが無理なく説明できる。

- (112) a. John decided not to go.  
 b. John decided to not go.

さらに、この分析では、*not* は VP 副詞とされながらも、T[+tense] によって特別に選択される VP の指定部要素であるという特徴付けにより、他の VP 副詞とは区別されるため VP 前置や VP 削除によって残される空範疇 [VP e] が時制節での定形の直後の *not* だけによって認可されるが、それ以外の *not* は他の VP 副詞のようにこの空範疇を認可しないという違いをうまくとらえられ、Baker の分析に見たような ECP に関する問題は生じない。

しかしながら、この説明は ECP からは導き出され

(109) によって、*not* は VP 副詞として (110) のように V' の姉妹として VP の指定部に生成されるとするが、他の副詞とは異なり、時制節においては T[+tense] によって選択される [+AUX] の V を主要部とする VP [+Aux] の指定部として (110) のように随意的に生成されるという点で特殊なものであるとする。また、T が [-tense] である非時制節では T[-tense] は *to* (ここでは V<sup>0</sup> と仮定されている) を主要部とする VP を選択する。この VP は [±AUX] に関しては無指定なので、時制節に現れるような T によって認可されるような *not* は生成されず、他の VP 副詞と同じく *not* も (111) に示すようにどのような V' の姉妹としても生成され、VP 副詞と統語的には違いはないことになる。



ないために、Ernst は次のような変形に関する認可条件を提案している。

- (113) Only constituents in a P(hrase)-licensing relationship with a specific lexical item may move or delete. (p. 130)

(113) によって、時制節における文否定の *not* のみが空の VP を認可でき、それ以外の VP 否定の *not* や (114) のように不定詞節での *not* は、通常の VP 副詞同様に、空の VP を認可しないことがうまく説明できる。

- (114) a. John decided to visit the party, but Bill decided not to [e].  
 b. \*John decided to visit the party, but Bill decided to not [e].

しかしこのような認可条件を認めると、例えば *not* が T[+tense] に選択される V[+AUX] (法助動詞, *do, have/be*) によって認可される VP の指定部であるこ



とから, VP 移動, VP 削除で変形が適用される要素は V' であることになり, 一般に仮定されている移動・削除などの変形は主要部範疇 X<sup>0</sup> と最大投射範疇 XP だけにのみ適用可能であるという仮説とそれに伴う「構造保持の仮説」に反して, 中間範疇である X' の移動・削除を認めなければならないという問題が生じる。これは可能な変形の幅を広げるという点で理論的に好ましくないことであると言えよう。

また, Ernst も脚註で気付いているように, 一般に移動と削除は同じ認可条件に従うわけではないことと矛盾を生じることになる。実際に, VP 移動と VP 削除は, 次に見るように適用環境が異なるが, Ernst の分析ではうまく処理できない。

- (115) They swore that John might have been taking heroin, and  
 a. [taking heroin] he might have been t!  
 b. \*[been taking heroin] he might have t!  
 c. \*[have been taking heroin] he might t!  
 (Akmaljan et al. 1979: 23)

- (116) John could have been studying Spanish and  
 a. Bill could [<sub>VP</sub> e] too.  
 b. Bill could have [<sub>VP</sub> e] too.  
 c. Bill could have been [<sub>VP</sub> e] too.  
 (Zagona 1989: 101)

他にも, 移動と削除を一緒に扱うこのような認可条件を認めると問題となりそうな例として Ernst 自身が挙げているものに, 次のように N' 削除はあるが, N' 移動は存在しないというものがある。

- (117) I'll take Bill's [<sub>N'</sub> e]  
 (118) \*What will you take Bill's [<sub>N'</sub> e]?

特定の語彙要素によって認可される要素のみが移動・削除を許されるとすると, 次の (119) ように述部を選択される要素の移動は良いが, (120) のようないわゆる随意的要素である修飾要素である付加部の移動の認可については, こうした付加部を認可する特定の語彙要素が何であるのかという問題が生じると思われる。

- (119) a. What do you like t best?  
 b. Where did you put my key t?  
 c. How tall are you t?  
 (120) a. Where did you meet my son?

- b. When will the party be held?  
 c. Why did you write such a letter?  
 d. How can you fix the car?  
 e. How fast can you swim?

以上のように, Ernst の分析は Baker のものよりも優れているとは思われるが, それでもいくつかの疑問点を持ち, not を否定副詞であるとするには十分に説得力のあるものとは思われない<sup>37</sup>。

## 5. 結 論

以上, 本稿では, 英語の文否定の否定辞 not が否定副詞であるとする C.L. Baker や Ernst の分析にはどちらも問題が多く, 妥当なものではないこと, そして not を機能範疇の主要部とする NegP 分析の方が好ましいことを示した。

## 註

1. ここでは Klima (1964) などの言う (i) のような例文に見られる語彙否定や構成素否定の not は考察の対象外とする。これら構成素否定の not は一応副詞の一種でそれぞれ修飾する最大投射に付加されるものと考えておく。VP 否定に関しては, 後述。

- (i) a. I visit them [not infrequently].  
 b. [Not long ago] I saw Sting mowing his lawn.  
 c. We sensed [not a little] hostility in his manner.

また, 同じく文否定でも否定辞の not が現れない次のような例も考察の対象外とする。

- (ii) a. No honest man would lie.  
 b. That was no accident.  
 c. He would say not a word.

これらの例が文否定であることを示すいくつかの統語テストがあるが, それについては Klima (1964) を参照のこと。

2. これらの VP 副詞は not と異なり (i) が示すように do-挿入が起こると非文になる。ただし, do に対照強調 (contrastive stress) が置かれた (ii) のような場合は文法的である。これは後述のように Neg と同じく強調辞 Emph という主要部が接辞繰り下げを阻止するからである。

- (i) \*John did often come to our party.

(ii) John DID often come to our party.

3. 原理・変数理論の概要については Chomsky & Lasnik (1991) を参照のこと。機能範疇と拡大節構造については、さらに Belletti (1990), Chomsky (1992), Laka (1990), Ouhalla (1990, 1991), Pollock (1989), Speas (1991) などを参照のこと。
4. Iatridou (1990), C.L. Baker (1991), Battistella (1987, 1991), Ernst (1992), Poeppel & Wexler (1993) などを参照。

Iatridou は、主として英語とフランス語の VP 副詞の生起に関して、Pollock の提案する AGRo への短距離動詞移動 (short verb movement) が不要であるとし、それに基づく Agr(P) の存在を否定し、分離屈折分析自体を批判しているが、NegP についてははっきりしたことは述べていない。ただ、NegP はあってもよいと示唆しているのみである。

5. Chomsky (1989) では T の代わりに [±finite] を表す F を用いているが、本項では時制 (tense) を表す T を用いることにする。また [±finite] と [±tense] は同じものであるので自由に区別なく用いておく。

AGRs と T の位置関係については Belletti (1990), Johnson (1991) 参照。AGRo に関しては Kayne (1989) の示唆によって仮定された。さらに、Chomsky (1986, 1992), Chomsky & Lasnik (1991) も参照。

節構造における Neg の位置については諸説がある。Belletti (1990) は英語の not をフランス語の pas, イタリア語の più とおなじように NegP の指定部にある副詞であるとしている。一般に指定部は、wh 移動, 演算子移動 (Operator movement), NP 移動などの移動先 (landing site) であり、最大投射である句 XP を生成する位置であるとされる (cf. Rizzi 1990)。Belletti (1990) はイタリア語では、否定副詞が NegP の指定部へと移動する例があることを示唆している。

また、目的語 NP については Chomsky (1992) の「極小主義 (minimalist program)」で仮定されるように LF で AGRoP の指定部に移動するものと考えられる。「VP 内主語の仮説」に関しては、Fukui (1986), Fukui & Speas (1986), Koopman & Sportiche (1991), Sportiche (1989) などを参照のこと。

6. この分析は Emonds (1978) に基づくものである。
7. 次のような文は必ずしも V 移動の根拠とはならないことに注意。

(i) a. John often kisses Mary.

b. \*John kisses often Mary.

この文では V 移動とは無関係に目的格の「格付与に対する隣接条件 (Adjacency Condition on Case assignment)」(Stowell 1981) に違反しているので排除される可能性がある。しかし (4) では補部が形容詞句 AP なので格付与は関与せず、英語に V 移動が無いことの真の証拠となる。また、フランス語では格付与の隣接条件は存在しないことが知られており、格付与の隣接条件は英語特有のものであり、UG の原理ではない可能性が高く、必要ないとした方が好ましい。従って、英語でもこの条件は必要ない、あるいは正しくないという可能性もある。Johnson (1990) はこの隣接条件は存在しないという議論を展開している。さらに Chomsky (1992) の極小主義の枠組では、構造的格は、従来のような S 構造に置ける統率のもとでの格付与ではなく、LF 段階での AGRP 内の「指定部-主要部一致 (Spec-head agreement)」による格照合 (Case checking) によって認可されるという「統一一致大理論 (Big theory)」を仮定するので、このような隣接条件は仮定できなくなる (cf. Mahajan 1990)。そうすると、(i) のような例も英語では主動詞は V 移動しないことの論拠になる。

しかしながら、Pesetsky (1989), Ouhalla (1990) では英語でも次の例のように主動詞が VP 副詞の前に移動する事が観察されている。

- (i) a. John looked carefully at the man.  
b. John carefully looked at the man.  
c. John looked at the man carefully.

こうした例に関しては、今のところその扱い方については保留としておく。

8. Chomsky (1989) は法助動詞は D 構造で T の位置に生成されると仮定している。この場合には主要部移動は関与しないとされる。また、Pollock, Chomsky は相助動詞の have, be は VP 内に V として基底生成され、法助動詞は D 構造で T に生成されると仮定している。しかし、Belletti (1990) はイタリア語などの複合時制 (complex tense) を形成する助動詞については VP ではなく、その上に別個に AUXP を仮定し、過去分詞も分詞の接尾辞を主要部とする AGRP を VP の上に持つとしている。

Ouhalla (1990, 1991) のように法助動詞は ModP を相助動詞は AspP をそれぞれ独自に投射するとするものもある。また、AspP については Jaeggli & Hyams (1993) も参照のこと。しかしながら、こうした機能範疇はどれも AGRsP, TP より下に位置

し、VPの上に位置する点では同じであり、階層的VP構造に等しいものといえる。

後述のように、これらの動詞の接尾辞である機能範疇に関して、Chomskyの仮定する節構造を修正すべきである。

9. Chomsky (1989) は、従来の分析に従って、非時制節である不定詞では T[-finite] が to として具現化すると仮定している。不定詞節では一致や主格の付与がないことから AGRs は存在しない可能性がある (cf. Ouhalla 1990)。あるいは、存在しても活性化していない (innert) である。そのため不定詞の主語には (ia) の時制節でのように AGRs によって主格が付与されず、(ii) のように補文標識 C<sup>0</sup> の for あるいは不定詞全体を統率する動詞が格を例外的に付与することになる。

- (i) a. It is unlikely [<sub>CP</sub> that [<sub>AGRSP</sub> you will succeed]].  
 b. \*It is necessary [<sub>AGRSP</sub> you to succeed].  
 (ii) a. It is necessary [<sub>CP</sub> for [<sub>AGRSP</sub> you to succeed]].  
 b. John [believes [<sub>AGRSP</sub> Mary to be honest]].

10. この (16) の主要部移動制約の定義は Travis (1984) のものである。この HMC が ECP に還元される制約であるという議論については M. Baker (1988: 53ff) を参照のこと。また後述のように、Chomsky は not が相助動詞などの V 移動を阻止しなくないことを指摘している。また接辞繰り下げも原理的には HMC の定義からは排除されるはずであるが、こうした問題は ECP が S 構造ではなくて、LF で適用される原理であるとすることで解決できることを示している。

Chomsky の分析とは別に HMC が全ての主要部移動による派生に関して絶対的に適用されるとする分析が Ouhalla (1990, 1991) によって提案されている。彼の分析は本稿で検討する余裕はないが、それによれば、相助動詞などが NegP の主要部である not を越えて T まで上がっているのは、英語の句構造では NegP がもともと have などより下にあるという節構造を仮定することで説明できるとしている。しかしながら、Ouhalla の仮定する節構造では be 動詞と not の位置関係がうまく説明できないと思われるので、本稿では彼の分析は採用しない。

11. 本稿では、後述の VP 前置・VP 削除の分析から、ECP は先行詞統率が主要部統率のどちらか一方を満たしていればよいという、選言的 (disjunctive) な

ものであるという立場をとる。Rizzi (1990) を始めとし最近の研究者の間では、ECP がこれら二種類の統率を同時に満たさねばならないという連言的 (conjunctive) なものであるとするものがあるが、必ずしもその必要はないとする議論に関しては Lasnik & Saito (1992) を参照されたい。また「障壁 (barrier)」の概念は Chomsky (1986) のものに従うこととする。

ECP は一般に LF で適用されるものとされている。さらに、Chomsky (1992) の極小主義の枠組みでは、このような UG の原理はすべて言語モジュールが他のモジュールに接する LF・PF というインターフェイスに適用されるものであるという方針に立っているが、その点からも ECP は LF での原則であるということが好ましい。

12. Chomsky は Kayne (1989, 1990) によるフランス語の過去分詞の一致現象の分析から、AGRo の存在を仮定しているが、最近の研究では AGRo の存在を疑問視する動きもある (cf. 外池 1993)。さらに、これらの副詞の生成については AGRo を仮定しなくとも説明できる可能性もあるかもしれない (cf. Iatridou 1990)。ここでは、一応 AGRo の存在を仮定して置くが、それについてはさらに検討を要すると思われる。
13. Chomsky 自体は NegP の内部構造についてははっきりしたことは述べていない。
14. 最近では外池 (1993) などで AGRoP の仮定が好ましくないとされているが、本稿では検討する余裕がない。日本語などでも AGR を仮定するかどうか問題である。Fukui (1988) などを参照。
15. この操作は (i) の「Lasnik の一般化」と呼ばれる接辞に関する形態論的 (あるいは音韻論的) 認可条件によって要求される。

- (i) Affixes must not be stranded at S-structure.

それに対して、Jaeggli & Hyams (1993) では、T を語彙化するために do-挿入がなされるとされている。本稿では、一応 (i) を仮定しておく。

16. この主要部移動は従来「主語-助動詞倒置 (Subject-Auxiliary Inversion)」と呼ばれていた変形に等しい操作であり、ゲルマン諸語で見られる「定形動詞第2位の現象 (Verb Second phenomena: V2)」にも関与している。
17. フランス語の ne, イタリア語の non などは、英語の not と異なり接辞的要素であることが、次の疑問文からもわかる (Ouhalla 1990: 212)。

(i) a. \*A-t-il ne pas lu Franz Fanon?

b. N'a-t-il pas lu Franz Fanon?

それに対して, Zwicky & Pullum (1984)では -n't は可視統語論のレベルではなく, 語彙部門で付加される派生接辞であるとしている。もし, それが正しければ can't などの法助動詞に否定辞が縮約形として付加されたものは D 構造で T か AGRs に基底生成されねばならないことになる。そうなるとこの否定形の法助動詞と文否定の NegP との間に何らかの関係が成立していると解釈しなければならないが, 具体的にどのような関係が成立するのかについては現在のところは不明である。

従って, ここでは Zwicky & Pullum のような分析はとらないで, -n't も D 構造では not と同じく Neg<sup>0</sup> に生成されるとしておく。

18. Ross (1991) は (28d) も受け身の過去分詞に強調強勢が置かれたり, それに続く部分に対照強調の強勢が置かれた場合にはとる容認性が上がるとしている。

(i) a. Terry must have been being not FOLLOWED, but merely AUDITED.

b. ? Terry must have been being not followed by ANYBODY. (Ross 1991: 459)

しかし, この例は not...but でまた別の構成素否定であり, 本稿の議論とは関係ない。

19. (47a) の文はそれ自体が多義的であることに注意。こうした法助動詞と否定に関する意味の曖昧性も文否定の Neg と VP 否定の not を区別すれば説明できる。

(i) You can not go.

(ii) a. You CAN not [<sub>VP</sub> go]. (Neg による文否定)

b. You can [<sub>VP</sub> NOT [<sub>VP</sub> go]]. (VP 否定)

また, Culicover は文否定の not の他にそれぞれの VP の左端に付加される VP 否定の not の必要性を示す例として, (i) は否定に関する意味的条件のために容認性こそ極度に低い, 文法的な文であるとは主張する。

(iii) John would not not have not been not paying his taxes for several years.

助動詞に関係した多重否定文 (multiple negation) については, 他にも Gazdar, Pullum & Sag (1982) などを参照。

20. Ouhalla (1990, 1991), Ernst (1992) も参照。Ouhalla (1990) の ModP に関する議論, とくに英

語の付加疑問文 (Tag question) に基づく議論は, 説得力に欠けるものだが, その結論は正しい。Ouhalla によれば, 法 (modality) を表す接辞が他の時制や相などを表す接辞とともに動詞に付加される言語があり, 独立の機能範疇である例も存在するという。また Ernst は助動詞と文否定の作用域の関係の議論から D 構造で法助動詞は not よりも下の位置に生成する必要があることを示しているが, (48) の構造を仮定すればこの事実も説明できる。

このような構造を仮定すると不定詞句には法助動詞が生起しないということを説明した不定詞の to と法助動詞の相互排除性が問題になると思われるかもしれない。それに関しては, ここでは Ernst (1992) と同様に Pullum (1982) に従って不定詞の to も動詞であると考え, Mod<sup>0</sup> に基底生成されると考えることで, こうした問題は生じない。

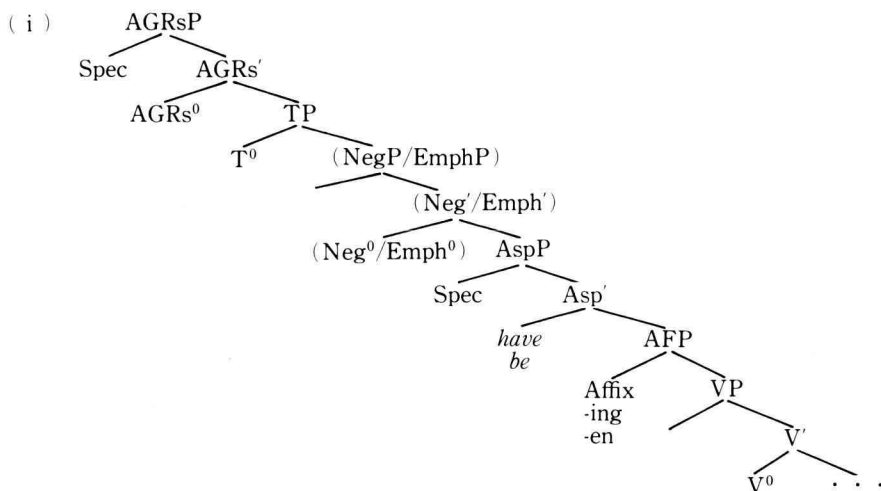
21. この too は米語口語表現で否定表現に対する強い肯定として「本当に, ところがどうして」という意味を持つ用法。(Genius 英和辞典, p. 1792) 次のような also の意味を持つ用法とは別。also を意味する用法では do-挿入は起こらない。

(i) He too wants to go.

22. Laka (1990: 95f.) も参照。Laka はバスク語 (Basque) でも同じ事が言えると報告している。ただしバスク語では否定辞句は AGRsP のさらに上にあるとされる。また, Laka は強調 (Emph) を Klima (1964) にならって Aff(ective) と呼び, NegP と EmphP の両方をまとめて ΣP と呼んでいる。これは, Culicover (1991) が極性句 (polarity phrase: PolP) として提案するものに似ているが, この点についてはさらに検討を必要とするが, 本稿では扱わない。Culicover の分析を展開したものに Nakajima (1992) や上山 (1992) がある。

またイタリア語には肯定強調辞である ben, piu (=indeed) があるが, Belletti (1990: 39ff.) によれば, これらも空の主要部を持つ EmphP の指定部の要素として分析できることが指摘されている。

23. Jaeggli & Hyams (1993) はこの強調辞 (EmphP) を含め, さらに相動詞句 (AspP) と have/be が取る補部の動詞の接尾辞も独立した機能範疇であるとして, 次の (i) のような節構造を提案している。



Jaeggli & Hyams は (i) の AFP が Chomsky (1989, 1992) での AGR<sub>0</sub> と同等のものである可能性を示唆している。これは Belletti (1990) のイタリア語の過去分詞の接尾辞句に等しいものと見ることが可能であろう。また AFP は Pesetsky (1989) の提案する  $\mu$ P に似ているが、Pesetsky は  $\mu$ P は AGR<sub>0</sub>P や、AFP のような接辞範疇ではないとしている。

24. 後述の VP 削除のような「削除」は、実際には D 構造で空の VP を生成するとした方が正しいことが Sag & Hamkamer (1976), Williams (1977) などによって示されているし、この空の VP が意味解釈に貢献しなければならないことは明らかなので、この LF での AGR<sub>0</sub> の痕跡の削除とは性質が異なる。従って、後でみるように VP 削除が ECP に従うとする分析に問題はない。

25. 英語以外でも否定辞が主要部移動を阻止しない例として、Rizzi (1990: 22) は Holmberg & Platzack (1988) のスウェーデン語を挙げている。

- (i) a. Jan köpte inte boken.  
 'Jan bought not books'  
 b. ... om Jan inte köpte boken.  
 '... if Jan not bought books'

スウェーデン語は他のゲルマン語同様に主節で定形動詞が (ib) に見られる基底生成の V<sup>0</sup> の位置から途中の機能範疇の主要部を経て C<sup>0</sup> まで上昇するという V2 現象を示すが、それは (ia) に見るように否定辞があっても可能であり、このことはスウェーデ

ン語では否定辞が主要部移動を阻止しないことを示唆している。

26. VP 付加や T' 付加の位置が A' 指定辞の位置と同じものかどうかは、疑問である。wh-移動のように指定辞への代入移動とは異なり明らかに付加移動である日本語などのかき混ぜ規則 (scrambling) は相対化最小性効果を示さないことが知られている (cf. Ueyama 1992)。日本語などのかき混ぜ規則が、英語の主題化変形 (Topicalization) などのように指定部への移動ではないことについては、Fukui (1993), Müller & Sternefeld (1993) などを参照。

27. Aoun & Li (1993) もこれと同じ構造を仮定している。また、Manzini (1992: 110) は not を NegP 指定辞の位置に生成するとしている。

28. ここで注意したいのは、同じ否定文でも否定辞が主語名詞句に限定辞として付加されたものでも、この効果が生じるということである。従って、否定の島効果は、文否定という意味論的要因によって引き起こされる現象と考える方がよいかもかもしれない。

- (i) a. What did no one say?  
 b. Why did no one come?  
 (Rizzi 1990: 21)

(ii) [<sub>NP</sub> [<sub>Det</sub> no] [<sub>N'</sub> one]]

さらに、否定の島現象は純粋な統語論的現象ではなく、意味・語用論なものであるとし、Rizzi のような統語論的分析を否定するもの達もいる。そうした反論については、Kuno & Takami (1992), Rooryk (1992) などを参照のこと。もしも彼らの反論が正し

いとしても、それ自体は NegP 分析にとって問題とはならないことに注意。

29. to not return の語順を認める言語学者もいる。Emonds (1985), Pollock (1989), Ouhalla (1990) Ernst (1992) は不定詞では not は全く他の VP 副詞と同じ分布を示すと述べている。

これは正しいかもしれない。もしそうだとすると、非時制句では NegP は存在しないことになる。すると NegP は T[+tense] によってのみ c 選択されるということになる。

30. この分析は基本的には Baker (1981, 1989) と同じものである。フランス語に関する同様の Pollock の分析への批判は Iatridou (1990) を参照。

31. Ernst (1983: 546) によれば、VP 内にもう一つ強勢の核が有る場合には強勢の置かれた助動詞が副詞の前に来ることが可能であるという。

32. Chomsky (1989) では、ECP は痕跡にのみ適用されるものであって、LF での AGRO で見たような削除による空範疇には適用しないとしている。さらに、Chomsky は VP 移動も D 構造から S 構造を派生する可視統語部門 (overt syntax) の派生ではないとしている。そうすると、この VP は D 構造で [<sub>VP</sub> e] と対をなして節頭に生成されるか、PF で文体規則 (stylistic rule) によって節頭に移動されるということになる。後者の場合には、やはり PF での移動も ECP に従うと考えられる (Aoun *et al.* 1987) ので、本稿の議論に問題はない。

また、本稿のように D 構造で主語 NP が VP 指定部に生成されるとすると、S 構造では主語 NP は AGRsP の指定部へと移動しているのと考えられるので、VP 指定部の位置に主語 NP の痕跡が残っていることになる。この痕跡も ECP に従うはずであるから、VP が移動しているのではなく、主語 NP を適正統率する要素となる AGRO を含んだ AGRoP の移動・前置であることになる。そうすると、(89a) (90a) の S 構造の後半部は正確には次のようなものになる (cf. Huang 1993)。

- (i) ..., and [<sub>AGROP</sub> AGRo [<sub>VP</sub> t get his PhD]<sub>i</sub>]  
he must t<sub>i</sub>
- (ii) ..., and [<sub>AGROP</sub> AGRo [<sub>VP</sub> t move the car]<sub>i</sub>]  
he did t<sub>i</sub>.

そして、(91a) の S 構造の後半部は次のようなものになる。

- (iii) ..., but [<sub>AGROP</sub> AGRo [<sub>VP</sub> t move the car]<sub>i</sub>]  
he did not t<sub>i</sub>

この構造は NegP が VP のすぐ上ではなく AGRoP の上にあることを示している。

また Huang (1993: 115) は VP 前置に関する Akmajian *et al.* (1979) のデータが、このような AGRoP 移動分析と相助動詞である have/be が  $\theta$ -枠を持たないのでも主語・目的語をその投射内に持たないため、AGRO に支配される必要がないことから、相助動詞の上には AGRoP がないと仮定することで、説明されるとしている。

しかしながら、本稿では議論の単純化のために VP 移動のまま論を進めることにする。

33. (93b) では VP 付加された completely が AGRo からの主語 NP の統率を阻止しないと思われる。これはちょうど次の例で how が AP 内主語の痕跡の統率を阻止しないのと同じである (cf. Huang 1993: 113)

- (i) [<sub>AP</sub> How t<sub>j</sub> proud of himself]<sub>i</sub> do you  
think John<sub>j</sub> should be t<sub>i</sub>?

が、そうすると (93a) でも will が completely の有無とは無関係に VP 痕跡を主要部統率できることになり、(93a) が文法的であることを予測してしまう。これらの例では completely や how が LF でこれらの意味的な被修飾部分であると思われる主要部である V や A に付加される位置にあると考えることで、この問題を解決することも可能かもしれないが、ここではセグメントの一部を移動することも禁止されると考えておく。そうすると、正しく (92a) や (93a) を非文法的であるとすることができる。

34. VP 削除を ECP によって分析する研究としては Lobeck (1991) を参照。Lobeck (1991) は削除句に対する条件として、次のような ECP の適正統率よりもやや厳しいものを仮定している (Lobeck は [<sub>VP</sub> e] を基底生成される pro として分析している)。

- (i) 削除認可の原理 (Lobeck 1991: 28)

[e] must be canonically governed by a functional head specified as [+Kase], [+Number], or [+Q].

従って、主要部統率は VP 削除のための必要条件にすぎず、十分条件ではない。しかしながら、Lobeck の提案もまだ不十分であるように思われる。それは、例えば、不定詞の to は T<sup>0</sup> であり VP を主要部統率

するが、それだけでは VP 削除を認可しないことから支持される。

- (ii) a. Because Mary might not [<sub>VP</sub> e], John will attend the rally.  
 b. \*Because [PRO to [<sub>VP</sub> e]] would be impractical, Mary won't go to the conference this year. (Lobeck 1991)

(iib) の不定詞節は適正統率されていない主語の位置にある。これは to が [-Tense, -AGR] であり, [<sub>VP</sub> e] を認可するために必要な素性が欠如しているからであると考えられる。同じように, 主語の位置にあっても否定辞がついている場合は VP 削除が認可される。

- (iii) a. \*Mary doesn't smoke because [PRO to [<sub>VP</sub> e]] is dangerous.  
 b. Mary doesn't smoke because she thinks [PRO not to [<sub>VP</sub> e]] is better for health.  
 (iv) a. \*You shouldn't play with rifles, because [PRO to [<sub>VP</sub> e]] is dangerous.  
 b. You must write a thank-you note, because [PRO not to [<sub>VP</sub> e]] would be impolite. (Zwicky 1982: 22)

また, 次の例が示すように外置された位置では to のみで VP 削除を認可可能である。

- (v) a. Mary doesn't smoke because it's dangerous [PRO to [<sub>VP</sub> e]].  
 b. She wanted to ask his age, but she realized it would be rude [PRO to [<sub>VP</sub> e]].

こうした事実は, to の左にある not が Neg であるばかりでなく, VP 削除を認可するのに十分な素性を持っていることを示唆しているとも見ることができる (ここでは not が to に接語化 (cliticize) していると考えられる。接語化の詳細は省略。Kayne (1989) 参照)。

さらに本稿での議論が正しければ, Lobeck の提示する機能範疇に Neg も加える必要がでてくるであろう。

また, この ECP による説明は基本的には Sag (1978, 1980) の提案した次の (vi) ような表層構造フィルターによる説明に等しい。

- (vi) \*  $\left\{ \begin{array}{l} Q \\ Adv \end{array} \right\} [\text{VP } e]$

ここでも, 文否定の not を副詞に含めると正しい予測ができなくなる。しかしながら, このフィルターに対しては反例となるものも報告されており, 問題は残っている。

- (vii) a. John hasn't gotten along with Grandpa lately.—Has he ever?  
 b. He's gotten along well with Fred in the past few weeks, but he hasn't always. (Baker 1981)  
 (viii) a. Terry knows how to build an H-bomb.—No! Does he REALLY??  
 b. Joe says he will run a four-minute mile on a steeple-chase course.—How could he POSSIBLY?! (Ernst 1983: 548)

Ernst はこうした例に生起する副詞は極少数の限られた種類のものであることを指摘して, Baker の分析では彼の仮定する変形規則へのそうした個別的副詞への言及が必要となり問題であるとしているが, ECP 分析でも, これらをどのように処理すべきかは今のところ不明である。

付加疑問文や普通の疑問文における VP 削除は, 一見このフィルターの反例に見えるかも知れないが, 主語名詞句が代名詞の時だけに限られることから, この場合の代名詞は C<sup>0</sup> に接語化していると考えられるので, 反例にはならない。

- (ix) a. Phil was diving a wet dishrag, WAS he?  
 b. Oh, did you?  
 c. \*Oh, did John?

ECP による説明では, これらの例では空範疇は VP ではなく IP (=AGRsP) であり, C<sup>0</sup> に主要部統率されているために認可されることになる。

- (x) [<sub>CP</sub> [<sub>C</sub> did+you] [<sub>AGRS</sub>P e]]

35. (104 b) については Emonds (1985), Pollock (1989) などを参照。こうした表現は学校文法などでは通常使われないとされるが, アメリカ英語の口語表現には時として見られるもので, 分離不定詞を認める話者には比較的容認され易いものであり, ここでは文法的なものであるとする。

36. Zagana (1989) を参照。後述の Ernst (1992) の分析ではこれらの例もうまく説明できるが, 最大投射ではない V' 削除を仮定しなければならないので問題である。ここでは, 移動だけでなく削除も含めて変形は XP か X<sup>0</sup> だけに適用されるという, より制限的な理論を仮定する (cf. Chomsky 1986)。

37. さらに, 彼の法助動詞と not の作用域の問題は助

動詞ごとの個別的意味特性として記述した方がよい  
 かもしれず, Ernst の議論の説得力は弱いと言える  
 かも知れない。

### 参 照 文 献

- Akmajian, A., S. Steele, and T. Wasow (1979) The category AUX in Universal Grammar. *Linguistic Inquiry* 10: 1-64.
- Aoun, J., N. Hornstein, D. Lightfoot, and A. Weinberg (1987) Two types of locality. *Linguistic Inquiry* 18: 537-577.
- Aoun, J. and Y.A. Li (1993) The syntax of scope. MIT Press.
- Baker, C.L. (1971) Stress level and auxiliary behavior in English. *Linguistic Inquiry* 2: 167-81.
- Baker, C.L. (1981) Auxiliary-adverb word order. *Linguistic Inquiry* 12: 309-15.
- Baker, C.L. (1991) The syntax of English not: the limits of core grammar. *Linguistic Inquiry* 22: 387-429.
- Baker, M. (1985) The mirror principle and morphosyntactic explanation. *Linguistic Inquiry* 16: 373-416.
- Baker, M. (1988) *Incorporation: a theory of grammatical function changing*. University of Chicago Press.
- Battistella, E.L. (1987) A note on LF verb raising and negation. *Linguistic Analysis* 17: 233-37 (appeared 1991).
- Battistella, E.L. (1991) The treatment of negation in double modal constructions. *Linguistic Analysis* 21: 49-65.
- Belletti, A. (1990) *Generalized verb movement: aspects of verb syntax*. Rosenberg and Sellier.
- Binkert, P.J. (1984) *Generative grammar without transformation*. Mouton.
- Chomsky, N. (1986) *Barriers*. MIT Press.
- Chomsky, N. (1989) Some notes on economy of derivation and representation. I. Laka and A. Mahajan (eds.), *MIT Working Papers in Linguistics* 10: 43-74. Department of Linguistics and Philosophy, MIT. Also in R. Freidin (ed.), *Principles and parameters in comparative grammar*. MIT Press (1991).
- Chomsky, N. (1992) *A minimalist program for linguistic theory*. (MIT Occasional Papers in Linguistics No.1) Department of Linguistics and Philosophy, MIT. Also in K. Hale and S. J. Keyser (eds.) *The View from Building 20: Essays in Linguistics in Honor of Sylvian Bromberger*. MIT Press. (1993) 1-52.
- Chomsky, N. and H. Lasnik (1991) Principles and parameters theory. Ms. To appear in J. Jacobs et al. (eds.), *Syntax: an international guidebook of contemporary research*. Walter de Gruyter.
- Cinque, G. (1990) *Types of A'-dependencies*. MIT Press.
- Culicover, P.W. (1982) *Syntax*. (2nd edn.) Academic Press.
- Culicover, P.W. (1991) Topicalization, inversion, and complementizer in English. Ms. The Ohio State University.
- Culicover, P.W. & W.K. Wilkins (1984) *Locality in linguistic theory*. Academic Press.
- Emonds, J. (1976) *A transformational approach to English syntax*. Academic Press.
- Emonds, J. (1978) The verbal complex V'-V in French. *Linguistic Inquiry* 9: 151-75.
- Emonds, J. (1985) *A unified theory of syntactic categories*. (SGG 17) Foris Publications.
- Ernst, T. (1983) More on adverbs and stressed auxiliaries. *Linguistic Inquiry* 14: 542-49.
- Ernst, T. (1991) On the scope principle. *Linguistic Inquiry* 22: 750-56.
- Ernst, T. (1992) The phrase structure of English negation. *The Linguistic Review* 9: 109-44.
- Fukui, N. (1986) *A theory of categories and projections*. Ph.D. dissertation. MIT.
- Fukui, N. (1993) Parameters and optionality. *Linguistic Inquiry* 24: 399-420.
- Fukui, N. and M. Speas (1986) Specifiers and projections. N. Fukui, T. Rapoport, and E. Sagey (eds.) *MIT Working Papers in Linguistics* 8: 128-172.
- Gazdar, G., G.K. Pullum, and I.A. Sag (1982) Auxiliaries and related phenomena in a restrictive theory of grammar. *Language* 58: 591-638.
- Haegeman, L. (1992) *Theory and description in*



- generative syntax: a case study in West Flemish*. Cambridge University Press.
- Haegeman, L. and R. Zanuttini (1991) Negative heads and the Neg Criterion. *The Linguistic Review* 8: 233-51.
- Hankamer, J. and I. Sag (1976) Deep and surface anaphora. *Linguistic Inquiry* 7: 391-428.
- Huang, C.-T.J. (1993) Reconstruction and the structure of VP: some theoretical consequences. *Linguistic Inquiry* 24: 103-38.
- Iatridou, S. (1990) About Agr(P). *Linguistic Inquiry* 21: 551-76.
- Jackendoff, R.S. (1972) *Semantic interpretation in generative grammar*. MIT Press.
- Jackendoff, R.S. (1977) *X'-syntax: a study of phrase structure*. MIT Press.
- Jaeggli, O.A. and N.M. Hyams (1993) On the independence and interdependence of syntactic and morphological properties: English aspectual come and go. *Natural Language and Linguistic Theory* 11: 313-346.
- Johnson, K. (1991a) The object position. *Natural Language and Linguistic Theory* 9: 577-636.
- Johnson, K. (1991b) The syntax of inflectional paradigms. Ms. University of Wisconsin.
- Kayne, R.S. (1989a) Null subjects and clitic climbing. O. Jaeggli and K. Safir (eds.) *The null subject parameter*. Reidel Publishing Company.
- Kayne, R.S. (1989b) Notes on English agreement. Ms. CUNY.
- Klima, E.S. (1964) Negation in English. J.A. Fordor and J.J. Katz (eds.), *The structure of language: readings in the philosophy of Language*. Prentice-Hall.
- Koopman, H. (1984) *The syntax of verbs: from verb movement rules in the Kru languages to Universal Grammar*. Foris Publication.
- Koopman, H. and D. Sportiche (1991) The position of subjects. *Lingua* 85: 211-58.
- Kuno, S. and K. Takami (1992) Negation and extraction. *Papers from the 28th Regional Meeting of Chicago Linguistic Society*: 207-317.
- Laka, I. (1990) *Negation in syntax: on the nature of functional categories and projections*. Ph.D. dissertation, MIT.
- Lasnik, H. (1981) Restricting the theory of transformations. N. Hornstein et al. (eds.) *Explanation in Linguistics*. Longman.
- Lasnik, H. and M. Saito (1992) *Move- $\alpha$ : conditions on its applications and output*. MIT Press.
- Lobeck, A. (1986) *Syntactic constraints on VP ellipsis*. Ph.D. dissertation. University of Washington. Available by Indiana University Linguistics Club Press.
- Lobeck, A. (1987) VP ellipsis in infinitives: INFL as a proper governor. *Proceedings of NELS* 17: 425-441.
- Lobeck, A. (1990) Phrase structure of ellipsis in English. S.D. Rothstein (ed.), *Syntax and Semantics 25: Perspectives on phrase structure: heads and licensing*. Academic Press.
- Manzini, R.M. (1992) *Locality: a theory and some of its empirical consequences*. MIT Press.
- Müller, G. and W. Sternefeld (1993) Improper movements and unambiguous binding. *Linguistic Inquiry* 24: 461-508.
- Nakajima, H. (1992) Syntactic differences between main and embedded clauses and the split COMP hypothesis. *Metropolitan Linguistics* 12: 18-38.
- Napoli, D.J. (1993) *Syntax: theory and problems*. Oxford University Press.
- Ouhalla, J. (1990) Sentential negation, relativised minimality, and the aspectual status of auxiliaries. *The Linguistic Review* 7: 183-231.
- Ouhalla, J. (1991) *Functional categories and parametric variation*. Routledge.
- Pesetsky, D. (1989) Language-particular processes and the earliness principle. Ms. MIT.
- Poeppl, D. and K. Wexler (1993) The full competence hypothesis of clause structure in early German. *Language* 69: 1-33.
- Pollock, J.Y. (1989) Verb movement, UG, and the structure of IP. *Linguistic Inquiry* 20: 365-424.
- Pullum, G.K. (1982) Syncategorematicity and English infinitival *to*. *Glossa* 16: 181-215.
- Rivero, M.-L. (1991) Long head movement and

- negation: Serbo-Croatian vs. Slovak and Czech. *The Linguistic Review* 8: 319-51.
- Rizzi, L. (1990) *Relativized Minimality*. MIT Press.
- Rizzi, L. (1990a) Speculations on verb second. J. Mascar and M. Nespors (eds.), *Grammar in Progress: GLOW essays for Henk van Riemsdijk* (SGG 36). Foris Publications.
- Roberts, I.G. (1985) Agreement parameters and the development of English modal auxiliaries. *Natural Language and Linguistic Theory* 3: 21-58.
- Roberts, I.G. (1989) Excorporation and minimality. *Linguistic Inquiry* 22: 209-18.
- Roberts, I.G. (1990) Some notes on VP-fronting and head government. J. Mascar and M. Nespors (eds.), *Grammar in Progress: GLOW essays for Henk van Riemsdijk* (SGG 36). Foris Publications.
- Roberts, I.G. (1992) *Verbs and diachronic syntax: a comparative history of English and French*. Kluwer Academic Publishers.
- Rooryk, J. (1992) Negative and factive islands revisited. *Journal of Linguistics* 28: 343-74.
- Ross, J.R. (1984) Inner islands. C. Brugman and M. Macaulay (eds.), *Proceedings of the 10th Annual Meeting of Berkley Linguistics Society*: 258-65.
- Ross, J.R. (1991) Verbiness and the size of niches in the English auxiliary. C. Georgopoulos, and R. Ishihara (eds.) *Interdisciplinary approaches to language: essays in honor of S.-Y. Kuroda*. Kluwer Academic Publishers.
- Sag, I.A. (1978) Floated quantifiers, adverbs, and extraction sites. *Linguistic Inquiry* 9: 146-50.
- Sag, I.A. (1980) A further note on floated quantifiers, adverbs, and extraction sites. *Linguistic Inquiry* 11: 255-57.
- Sawada, H. (1991) The perfective *have* and the progressive *be* as spec verbs and the INFL system in English. H. Nakajima (ed.) *Current English linguistics in Japan*. Mouton de Gruyter.
- Speas, M.J. (1990) *Phrase structure in natural language*. Kluwer Academic Publishers.
- Sportiche, D. (1988) A theory of floating quantifiers and its corollaries for constituent structure. *Linguistic Inquiry* 19: 425-49.
- Stowell, T. (1981) *The origin of phrase structures*. Ph.D. dissertation. MIT.
- Travis, L. (1984) *Parameters and effects of word order variation*. Ph.D. dissertation. MIT.
- Ueyama, A. (1992) 「機能範疇と機能素性の認可条件」京都外国語大学研究論叢 XL 号.
- Wexler, K. and P.F. Culicover (1980) *Formal principles of language acquisition*. MIT Press.
- Williams, E. (1977) Deletion and logical form. *Linguistic Inquiry* 8: 101-139.
- Zagona, K. (1988) *Verb phrase syntax: a parametric study of English and Spanish*. Kluwer Academic Publishers.
- Zwicky, A. (1982) Stranded *to* and phonological phrasing in English. *Linguistics* 20: 3-57.
- Zwicky, A. and G. Pullum (1983) Cliticization vs. inflection: English *-n't*. *Language* 59: 509-13.